

第六話

第五項「わが教団は、神秘を語らず迷信を説かず、
堂々と如是法を挙揚し、合掌して人間禅
を宣布する。」

この項は、(初日第一話で紹介しました)耕雲庵老大師の考えられた人間禅の精神の特徴3箇条の3番目「神秘性を説かないこと」が中核になっています。

「神秘を語らず迷信を説かず」は、耕雲庵老大師のお言葉通りであり、是を先ず味わってみましょう。「神秘性を説かず、理外の理を語らぬことであります。之は夙(つと)に自然科学を研究して来たった私として、年来の主張であります。そして自力の修行を標榜するものとして、私は曾て一度も「仏天の加護」とか「神明の冥助」とかを口にした事がありません。又「仏罰」とか「神罰」とか云う語を最も憎みます。『大法に不可思議なし』之が古(いにしえ)今に亘(わた)って一貫した真理であります。私は超人間的な神仏や、実在を離れた幽冥界や、所謂肉体を離れた靈魂と云う様なものを断然否定します。世には、宗教の世界と云う特別な世界があって、何か「理外の理」と云う様なヴェールに隠れ神秘性でも説かないと宗教では無い様に誤解して居る者が沢山居ります。そう云う人々が、此の私の説を聞いたなら定めし驚嘆もし、或いは迫害を加えてくるかも知れません。然し臚(やが)てそれらの非科学的宗教は時勢の進運に従って置き去られ、今吾が教団を誹謗する人々も良き理解の下に吾々の仲間となって堅く握手する日の近きにある事を信じて疑わぬ者であります。」

もう7年前になりますが、学習院大学百年記念館における国際会議「Seience and Spirits」に出席し、外国の人も含めいろいろな宗教家と交流して判ったことでありますが、現在の世界におけるメジャーな世界宗教と雖も、耕雲庵老大師のこの明快な「科学と宗教」の位置づけを持ち得ている宗教は現在ないのではないかと感じました。それはもちろん老大師が科学者であったということもありますが、それよりももっと重要なことは、ほんとうの宗教に耕雲庵老大師が透徹されているということでもあります。

磨輒庵老師は、ほんとうの宗教は常に新しいという云い方をされています。仏教で云えば、釈迦牟尼世尊が暁の明星を徹見して悟りを開かれた大法の根源の見地と境涯の継承は、仏仏祖祖が一器の器に一器の水を注ぎ続けてきたものであり、大冶の精金変色無しで、現在まで二千五百年間いささかも色あせることなく生きて伝えられている。すなわち二千五百年の間 変わらずということが、何故常に新しいのかという疑問が起こるべしであります。何故か？それは宗教の原点、大法の根源がほんものであり、不生不滅であるからこそ、新しい時代に常に相応しく適合でき、自利利他の願輪をその時代に合わせて展開できるのであります。先の段の「禅本来の面目なる自由と平等」も同じことで、釈迦牟尼世尊の開示されたものがいささかの変色もなく伝えられている禅においては、当然ほんとうの自由とほんとうの平等が純粹に生きています。だからこそ、どのような時代になろうとも、どんなに科学技術が発展し、デジタル社会になったとしても、大法の拳揚は常に新しく、いつの時代のどのような人々に対しても柔軟に対応し展開できるということになるのであります。

全ての世界宗教の創始者のその真正の見地と境涯は、等しくそうあるはずなのですが、時代の変化に対して柔軟に適合できなくなっているのは、創始者が間違っているのではなく、伝わってい

るものが宗教としての上部構造の儀式とか組織体制だけで、真正の見地や境涯が伝わっていないからであります。

そして宗教の説明とその必要性について、耕雲庵老師が語られている小生の好きなフレーズを味わってみたいと思います。「われわれ人間は自らが有限であり相対的でありながら、しかも無限をもとめ絶対をあこがれずにはいられない存在で、そこに人間のもっとも人間らしい点があるのである。そして相対的で有限な自己と絶対的で無限なものとの間に正しい通路を打立て、自己を絶対のなかに位置づけるものが実に宗教なのである。そして自己が絶対のなかに正しく位置づけられたのを発見した時、人々はそのはじめに真の満足を得るのである。だから人間は宗教によってのみ真の満足を得ることができるといえよう。」この本物性が伝わっているかどうか、この見地と境涯がクリヤーに本物かどうか問題なのであります。

「神秘を語らず、迷信を説かず」ということは、保持している宗教の原点が本物であり、磐石の自信に裏付けられていると云うことであります。我々にとっては何ら違和感のないところですが、一般的に世界的に見ると、世界宗教といわれ、2000年以上の経過において何億人もの信奉者を持っていても、進化論を教義と反するとして容認していないという事態が今日まで続いていたり、また教義が異なると云って同じ宗教の中の宗派間での血で血を洗うような宗教戦争に歯止めが利かないのであります。色々な教義や教団としての伝統はあってもいいのですが、原初の宗教的根源がつねに生きておれば、2千年以上の年月の歴史に洗われて続けている世界宗教であれば、最初から根のない似非宗教である新興宗教とは違うわけですから、宗教者同士が争いを起こすはずは本来あり得ないのあります。(何故争いが起きているかは、いわなくてもお判りでしょう。)

耕雲庵老師が、ご自分で「自然科学を研究していた私としての
年来の主張」ということで、科学に反する教義を認めないと云わ
れていると解釈するのは、浅い見方だと思います。先の国際会議
「Science and Spirits」に集まれた人は全て、科学技術者で同
時にそれぞれの宗教家であるという人たちの集まりで、ノーベル
賞候補だという方なども居られたようです。科学技術の専門家と
して立っている人であるからと言って、耕雲庵老師のように「神
秘を語らず、迷信を説かず」とはっきりと言い、靈魂も死後の世
界も全くないと断言できない人がかなりいるのであります。した
がって自然科学をやっているからと云うよりは、禅の奥義を完璧
に見切られた見地から、宗教というものの全貌を見極められ、そ
の結果として、確信を持って言い切られているのであります。宗
教性において、最も深く、もっとも明確に見切られているからの
断言であると認識しなければならないと考えます。

ここで先程紹介しました「科学とところ」国際会議（2002
年）で小生が発表した論文のなかで、科学と宗教に関する部分を
抜粋してご紹介します。

1. 禅における科学観（宗教と科学の違いと相互関係）

（1）科学は万能ではない。

“死に対する恐怖”からの根本的解決は、科学では出来ない
（耕雲庵英山著『人間形成と禅』文献1）。

また、“人生の意義”“私は誰？”“私はどこから来たの？”（文
献2）に対する根本的解答は、科学では出来ない。

科学の領域とは別に、宗教の領域・宗教の切り口が、人間およ
び人間社会にとって必要不可欠であると認識している。

（2）科学技術の成果は、諸刃の剣である。

科学技術の進歩と弊害の両面を的確に評価しなければならない。
い。

すなわち、科学技術者も科学技術者の前に人間でなければならぬ。人類的視点に立つことが、21世紀の科学技術者の必須条件である。

例えば、生命科学（クローン人間を含む）の発展には、科学者技術者だけの判断で進めてはならないと云う認識が、科学者技術者の当事者に無ければならぬ。即ち、科学者技術者も宗教的理解を深めると共に、宗教界へ働きかけて、人類的視点で取り組み進めなければならぬ課題は年々増加している。

（3）科学と宗教は異なる領域であるが、本質的には相反しない。

科学と宗教の領域の違いを無視すると相克することになる。即ち、科学の領域で宗教を解釈・尺度してはいけぬし、宗教の領域で科学を解釈・尺度してはいけぬ。科学の切り口で未知なるものも、あくまで科学がまだ説明していないというだけで、決して宗教的に解釈すべきではない。逆に、宗教の本質、教義を宗教の外の科学の領域で解釈したり、科学の尺度でその是非を判断してはならぬ。範疇、領域が違っていることを明確にしておかなければならぬ。

また、事実を基礎として普遍性の法則を客観的に把握しようとする科学の本質と、永遠なる真理に合掌し一体化しようとする宗教の本質とは、本来矛盾するということはあり得ない。

（4）新しい時代の宗教は、科学と矛盾しない教義に変換しなければならぬ。

科学がまだ未発達な古い時代の宗教の布教・救済には、当然ながらがしが現代では滑稽であったり、あるいははっきりと科学の真実と矛盾する表現とか教義を含んでいるのは必然的であったと認識する。

すなわち、“あの世”“地獄に落ちる”“靈魂・ひとだま”等を古い時代に布教の方便として使っていても、その古い時代にはその時代の科学と矛盾していたわけではなく、科学と矛盾した教義を持っている宗教としてその宗教的本質を疑問視することは出

来ない。おそらくその方便が、その時代にはふさわしく、それで多くの人々が救済されたと考えるべきであろう。

宗教の本質は古今東西不変であるが、それを布教、教導する表現やその為の教義は、その時代その時代の科学の進歩で明らかになった常識 (common sense) と矛盾するものを持っているということは問題である。

すなわち、現代科学に反する教義 (時代を反映した布教のための教義) を伝承している宗教は、21世紀の世界宗教としてはふさわしくないと考えざるを得ない。古い時代の方便や表現、教義をそのまま21世紀にも使い続けると、新しい次代を担う若者にそっぽを向かれる (宗教の本質を誤解させる) ことになる。それは彼等にとって大変不幸なことであると共に、将来への本当の宗教の伝承に対しても大きな障害となるものである。

[参考文献 1] 立田英山著 『人間形成と禅』 和英対照 1999.5

[参考文献 2] Jostein Gaarder著 『ソフィーの世界』 1995.6

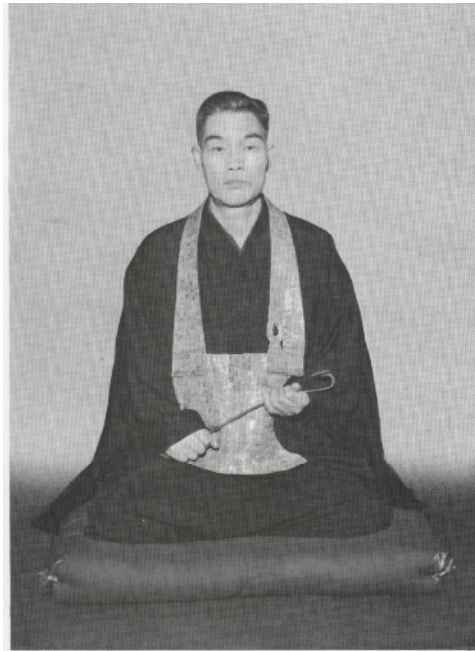
「堂々と如是法を挙揚し、合掌して人間禅を宣布する」これは、この5番目の項と云うよりは、『立教の主旨』の5項目全体を締めくくっての言葉であると考えます。

堂々と、という言葉にも万感の意味が含まれていると思います。決して肩を張った威勢のいいことをいいたいわけではなく、「自負と責任を担って、背筋を立て、目線を高く持って」であります。

この「堂々と」という言葉から連想する小生の若かりし学生時代に感動した言葉があります。それは、人間禅教団二世総裁妙峰庵佐瀬孤唱老師が、教団摂心会で、「禅者たるものは、切ったら血が吹き出るくらいな熱いものを持っていなければならない！」と獅子吼された言葉であります。それまで、禅、禅をやる人は、もの静かな、控えめなイメージを漠然と持っていましたの

で、余計に印象的だったのでしよう。自信と熱誠の揺るぎなさ、この「堂々と」に籠められているのであります。

この確信と矜持を若い人は自分の腹に入れて頂きたいと思います。実際に世界の宗教界、日本の仏教界、世界の禅界からみて、わが教団はまだまだ極めて弱小ではありますが、仏祖嫡伝の如是法を担っていること、第二段、第三段、第四段で鮮明に掲げたように、新しい時代に適合可能なほんものの宗教団体であること、



二世総裁 妙峰庵孤唱老師

そしてこれからの地球人類的視野を持っていることを腹に入れて、世界の隅々世界の全ての人達に対して、合掌して人間禅を宣布するのであります。（「合掌」の十徳と「正しく・楽しく・仲よく」の関係について、耕雲庵老師が『人間禅の精神』に書かれております。）

みなさん、我々は、とてつもない凄い教団に縁を持つことが出来ているのであります。古来仏縁に巡り会えることは、優曇華の華が咲くのに巡り逢えるほど極めて難遭遇であるといわれておりますが、その仏縁の中でも、この『立教の主旨』を持つ人間禅に会うということは、確率から考えても天文学的に奇跡的なことであり、ほんとうに文字通り有難いことであります。

一生一度しかない人生であります。この『立教の主旨』に巡り逢えた機縁をしっかりと握りしめ、悔いなく生きたいものであります。そして、天文学的に奇跡的というこの機縁を忝なく正受し、

自分の回りの人々の菩提心の灯火に一つ一つ点火してゆき、回向の輪を広げてゆき、暗い世の中を明るい日本に Change ! し、戦火の絶えない世界から平和な “ 正しく・楽しく・仲の良い ” 世界へ Change! し、地球環境の深刻化に歯止めをかけ、地球上の他の生物とも共存し、永久に持続できる地球へ Change! しようではありませんか。

その為には、この道を共にできる志ある人を一人ずつ増やし、把手供行し、一步一步進もうではありませんか！ それを取りも直さず、このすばらしい『立教の主旨』の進展に繋がるのであり、明るい未来を切り開くのであります。

合掌

『立教の主旨』

- 「一、わが教団は、自利利他の願輪を廻らして、ほんとうの人生を味わいつつ、世界楽土を建設するのを目的とする。」
- 「一、わが教団は、坐禅の修行によって、転迷開悟の実を挙げ、仏祖の慧命を永遠に進展せしめる。」
- 「一、わが教団は、正しく・楽しく・仲よく 人間味の豊かな人々の家庭である。」
- 「一、わが教団は、禅 本来の面目なる自由と平等とを尚び、各自の人格を尊重する。」
- 「一、わが教団は、神秘を語らず迷信を説かず、堂々と如是法を拳揚し、合掌して人間禅を宣布する。」

丸川春潭 九拝